

感染症薬学のひきだし

疾患・治療・制御の基本から応用まで

松尾 宏一, 川上 和宜, 中野 貴文(編)

なゆたの森病院長／前・佐賀大医学部教授

青木 洋介

感染対策チーム(ICT)の全職種が共有できるテキスト

「学習成果を実社会で発揮するためには、継続的な脳への情報のinputに加え、脳内に蓄えられた知識を適時・適格にoutputすることのできるスキルも同様に不可欠である」(Benedict Carey^註: How We Learn—Throw out the rule and unlock your brain's potential, Random House, 2014)。

この「Input」と「Output」の双方を司るために必要なのが脳の中の“ひきだし”に相当するのではないか。専門家になっていく過程で多くの情報(知識)を修得し、その時点まで培った知識体系の中で意味付けをし、自分の知として咀嚼・取得としたものを系統的に管理するスペースが“ひきだし”である。普段は意識上になくとも、目の前の課題に対応するひきだしを開けることで、その場面で必要とされるセオリーや問題解決の糸口を自ら取り出すことができる。優れた専門家は、ひきだしの中身のみでなく、ひきだしの組み方自体も必要に応じて更新し、体系だった思考回路をupdateし、常に実践的であろうと心掛ける。

本書『感染症薬学のひきだし』は、“ひきだし”と名のつくとおり、学習者が知識体系を整理し、機動性を持たせることを支援してくれるテキストである。感染症の総論および疾患各論、抗微生物薬の各論、そして感染制御と、大きな4段のひきだしからなり、感染対策チーム(ICT: infection control team)機能の全体をカバーする構成になっている。全ての各論(1~39)においてサブテーマが記載されており—例えば「26. その他の抗菌薬」の副題は、“使いこなせば便利な名脇役たち”である—、これらが新作映画のキャッチコピーのように、早く中身を見たくなる気持ちにさ

せてくれる。

いずれの各論も冒頭の「はじめのひきだし」は非常に重要で、後に続く詳細なfactsの学習内容を俯瞰する道標的役割を果たしている。さらに「ステップアップのひきだし」は、最新のトピックスや専門的に特化した知見が紹介されている。これは執筆担当者が重視する事項が何であることを示しており、同分野にいそしむ自分以外の専門家がひきだしに格納している知恵を知ることにもなり、興味深い。同時に、読者のひきだしの中身も細部にわたり充実することが期待される。

『感染症薬学』と題された本書であるが、感染症の治療薬(3段目)は当然ながら、感染症各論(2段目)の内容も過不足なく記載されている。4段目の感染制御学は図説や写真も多く、施設内感染対策の保守点検に活用することができる。さらに巻末の付録では、予防接種が類別化されており、各ワクチンの接種時期、接種法について丁寧に表記されている。このように、全体を通して本書はとても実用的なものとなっている。

『感染症薬学のひきだし』はICTの全職種が共有できるテキストである。時間をかけてでも皆で読み上げることができれば、チーム力が向上し、個々の患者さんの診療の質向上に十分に貢献できることが期待される。各自の知的“ひきだし”を構築しながら、ぜひ読み進めていただきたい一冊である。編集・編集協力の先生方の手腕に敬意を表したい。

註)ベネディクト・ケアリー(1960年~)はニューヨーク・タイムズの医療・科学担当記者。

●B5/頁512/2025年
定価: 5,280円(本体4,800円+税10%)
[ISBN978-4-260-05784-4]
医学書院 刊